

# ポストヒューマン状況に立ち現れた<倫理> —「切断」の概念をめぐる—

根 村 直 美

## abstract

This paper explores, based on Roden's analysis, what kind of ethics is developing in the posthuman situation.

Roden argues that under the posthuman situation, the self is considered as a “functionally autonomous assemblage” based on an “autonomous systems approach.” According to Roden, an assemblage with functional autonomy has agency with or without representations of the life form and the self. In connection with this autonomous systems approach, Roden presents the thesis of “disconnection,” which can be thought of as a relationship between assemblages and as a singular event produced by an encounter between assemblages. Based on this thesis, Roden concludes that the power to break off existing relationships and create new ones in response to changing circumstances is the power that sustains the self.

The ethical thesis of “disconnection” presented by Roden is descriptive, and it is up to us to choose whether or not to “take on” that ethics in the future. However, the thesis is noteworthy from the standpoint that the willingness to maintain the self has led “human beings” toward a moral system. From that standpoint, the thesis can be regarded as the starting point of posthuman ethics and an indispensable one.

## I. はじめに

本稿では、David Rodenがポストヒューマンをめぐる倫理についてどのような考えを示しているかを分析することを通じて、人間と機械が接続された<ポストヒューマン状況>の進展にともない、我々がうみだしつつある倫理を明らかにすることを目的としている。

Rodenは、その著書 *Posthuman Life* (London: Routledge, 2015) において自身の立場を「思弁的ポストヒューマニズム (speculative posthumanism)」と位置づけている。しかしながら、Rodenは、ポストヒューマンをめぐる倫理を、自身の思弁的ポストヒューマニズムと「クリティカルなポストヒュー

マニズム」の立場が収斂する地点と考えており、その論考はクリティカルなポストヒューマニズムの視座から倫理を考える試みにとっても多に示唆を与えてくれると考えられる。

ところで、本稿では、Rodénがポストヒューマンをめぐる倫理をどう考えているのかを分析するのに先立ち、Rodénのポストヒューマニズムでは、主体の概念がどのように再構成されているのかを明らかにする。倫理学においては、道徳的行為者と道徳的受容者の概念の中核に置かれてきたのは、＜自由意志をもち、その意志にしたがう自律的な主体＞であった。しかし、Rodénが提示するポストヒューマン状況の倫理は、その主体の再構成を前提としたものである。そこで、その主体概念を紐解いたうえで、ポストヒューマン状況にある我々がうみだしつつある倫理について、Rodénがどのような議論を展開しているかについて分析を試みることにする。

## II. Rodénにおける主体の理論と「切断」のテーゼ

### 1. 「機能的に自律する集合体」としての主体

まず、Rodénの *Posthuman Life* において、主体の概念がどのように把握されているのかについて明らかにする。なお、以下では、その著作で行われている議論については、ページ数のみを示すこととする。

#### 1.1 機能的に自律するシステムに基づくアプローチ

Rodénは、「自律的システム」に基づいたアプローチを提唱し、ポストヒューマン状況のもとにある自己を「機能的に自律する集合体 (assemblage)」と捉えた (pp.124-125)。

Rodénによれば、広い意味での自律的な存在とは、それらの存在が生形式を表象していない、あるいは、自分自身を自己として理解していなかったとしても、その主体性 (agency) がそれらの存在の生の形式の維持に貢献している存在である。そのアプローチにおいては、機能は、自律的システムに対する貢献によって決定される。Aristotleのアプローチとは異なり、自律的システムに基づいたアプローチは、個々のシステムを超えた不変の形式や本質によって固定された目的を必要とはしない。一方、Kantのアプローチとも異なり、機能は、人間による説明の産物ではなく、現実の依存関係と考える。また、そのアプローチは、あるものの機能がいかに集合体によって「取得 (capture)」されることに拠って立っているかについての説明を提供するものであり、その説明は因果的・歴史的説明よりも満足がいくものである。さらに、その説明は、機能を主体性と結びつける。そのため、そのアプローチは、ポストヒューマン的存在が、Locke的、あるいは、Kant的な意味での人格ではないとしても、生きる主体 (agent) でありうるという考えをもたらすのである。

これはまた、それらの機能が、個々の存在やグループの意図によって存在するようになる必要はないことを意味する (p.127)。自律的システムに基づくアプローチは、誰かがそれらが存在するようになることを意図したわけではないような漸進的なプロセスによって人間に関連する何らかの機能が存在する

ようになる, という考えと両立するのである (p.127).

## 1.2 機能的自律性

続いて, Roden の自律的システムに基づいたアプローチが拠って立つ「機能的な自律性」という概念についてより詳しく見ていこう (pp.134-139).

機能は, 能動的に自己を維持しようとするシステム内の相互依存関係のプロセスである. そして, 能動的な自己維持とは, システムの凝集性を維持する特殊な能力である. あるシステムは, その構造が, 広範囲の文脈にわたって統合されたダイナミックな行為を示しているのであれば, 相対的に凝集性を有する. 能動的な自己維持とは, 生けるものによって共有される能力であり, それは, 特定の集合体である生けるものの中に基礎をもつ. J. D. Collier と C. A. Hooker が言うように, この集合体は, 環境的な影響に対する生けるものの傷つきやすさや感受性と緊密に関連しているため, 生きていないもののシステムの複雑さとは非常に異なる (Collier and Hooker, 1999)

つまり, 自律性というのは, 応答的で適応力がある組織体に基づいており, その柔軟性は多層的で相互的に支え合っているプロセスに依存する. 複雑な集合体の中のそれらのプロセスは内的な変化をうむが, 適応力のある応答はその変化に依っている. 一連のプロセスは持続のためにお互いに依存しているが, それらは, そのシステムが全体として依存するアウトプットをうむ.

機能的なプロセスが相互依存的であるという条件は重要である. なぜなら, それが, システムの外の環境的なプロセスをシステムの機能と同定することを防いでいる. 例えば, 太陽光は, 植物の光合成にとって必要であるが, 太陽の熱核反応は植物には依存してはいない.

機能的システムに基づいたアプローチは, 諸器官の機能や動きを決定する, 生命の活動としての魂についての Aristotle の見解とよく似ている. しかしながら, そのアプローチでは, 自律的システム内のプロセスの機能は, システムのみに依存しそのシステムの世界への対処に依存しているため, 客観的目的論を反本質主義で調整することができる. 機能の基礎は, 複雑で組織化されたシステムであり, 物質から分析的に区別される形式ではない.

一方, 機能をプロセス依存的な関係と考えると同時に, それらを物質やシステムの中に位置づけることが可能である. 同様なアプローチが, 音についての「置かれたイベント理論」の支持者によって採用されている. その理論によれば, 音とは, 鳴り響く物質の中に置かれた振動という出来事である. この理論は, 機能をプロセスに基づいて分析する方向性を損なうものではなく, 生物学的存在とその多彩な来歴について語ることを可能にする.

例えば, ウイルスは, 典型的に新陳代謝, あるいは, 細胞外の自律的な生産活動の手段を欠いている. ウイルスは, 利用できる新陳代謝や生産機能を備えた細胞と“結合する”以前は, 自動力のない一塊の RNA, あるいは, DNA としてはじまる. この生命のサイクルをプロセスという用語だけに関連づけるのは, 不可能ではないが, 難しいかもしれない.

それゆえ, 歴史的に移動可能な物質が存在するような, より豊かな集合体の存在論のうちに, 機能性

というプロセスの説明を組み込むもっともな理由がある。集合体は移動可能な部分から成り立っているため、その説明は全体主義に関わる必要はない。結局、それは構成の多元主義的なモデルを提示する。物質は、物質の諸階層とともに、イベントとプロセスによって構成される。

以上のような議論に基づき、Roden は、機能的に自律したシステムに基づくアプローチについて次のように論じる (pp.139-140)。

1) どの自律的システムもその歴史のある時点でそれに属する機能をもつ。それらの機能は、そのシステムがその時点での存在に必要とする、相互依存的なプロセスである。2) あるプロセス、もの、あるいは、状態がその機能が生じるのに必要とされるのであるとするなら、そのものやプロセスは、その機能にとって価値である。どのような存在物、状態、あるいは、資源でも価値となりうる。例えば、ある機能が適切に発揮されることは、それが機能することを求める諸機能にとって価値となりうる。3) 自律的システムがある機能をうむとき、その機能の価値がそのシステムによって選び取られている。4) 自律的システムは、他の自律的システムにとっても価値のある機能をうみだすことによって積極的に機能を獲得する。5) 価値を選び取り、機能を獲得する、どの自律的システムも、機能的に自律したシステムである。こうした説明は、心理学からは自由である。それは、機能と条件との間の環境的な関係という観点から価値を特定しようとする意味で生態学的な価値の説明である。また、それは、主観的な説明ではなく、客観的な説明なのである。

そうした説明には、「有機体」ではなく「集合体」の理論が相応しい (pp.145-146)。集合体は、どこでも作動する可動性のある構成要素からなり、分解可能であるため、それらの統合は常に暫定的なものであり、それらの性質、および、構成要素の性質を変えるような混乱の影響を受けやすい。「脱領域化」<sup>(1)</sup> は、秩序化された集合体の物質的、あるいは、形式的な要素がある定着した文脈との関係を断ち切り、新たな能力、新たなルール、新たな機能モードをもつ集合体をうむところで起こる。組み立てられたどのシステムにおいても、潜在力をもち、他の集合体と結びつくか、あるいは、他の場所での活動であるために新たな文脈において反復される構成要素が存在しているのである。

## 2. 思弁的ポストヒューマニズムとクリティカルなポストヒューマニズム

最初に述べたように、Roden は思弁的ポストヒューマニズムの立場を取っている。ここで、Roden の立場とクリティカルなポストヒューマニズムの立場の相違をおさえたうえで、そうした相違にもかかわらず、両者が倫理をめぐる考察においては収斂していくことを確認することとしたい。

### 2.1 相違の核心

ここではまず、クリティカルなポストヒューマニズムがどのような議論を展開しているかを Roden にしたがって明らかにする (p.24)。

クリティカルなポストヒューマニズムの論者である N. Katherine Hayles と Neil Badmington によれば、ポストヒューマンという用語は、自己承認し自己統治する人間主体が果たす役割の正統性が失われ

てしまった近代後期の段階に当てはまるものである。そのような喪失は一部にはテクノサイエンス的なものを起源とする。コンピュータの進化が、合理的活動は適切に構造化された機械的なプロセスによって行われることを示したため、内部と外部、心と機械的しくみの間の二元論は維持しがたくなったのである。

クリティカルなポストヒューマニズムは、アカデミックな人文学の中にある人間と非人間との二元論の変化への対応である。すなわち、自律的であり自己現前すると想定された人間主体の複雑な見直しであるが、その見直しは、Badmington によれば“人間中心主義的な思考の脱構築的な視点をともなう”(Badmington, 2003) ものである。この脱構築は、人間の超越性、および、機械や物質的自然からの分離性を描くか、もしくは、想像するテキストが、人間を人間ではない“他者”から切り離すことに失敗していることを示す様々な方法から成り立っている。

こうしたクリティカルなポストヒューマニズムの論者たちにとって、ポストヒューマン的な後続種というものはありえない。なぜなら、我々は、すでに「ポストヒューマン」になっているからである。

これに対して、Roden によれば、思弁的ポストヒューマニズムは、シンギュラリティ (技術的特異点)<sup>(2)</sup> が起こりうると考えている (pp.21-22)。つまり、ポストヒューマンは、技術的な改変の歴史の結果、もはや人間とは言えないような、広い意味での現在の人間の“子孫”を想定することができると思う。思弁的なポストヒューマニズムは、人間とは非常に異なる世界を経験し理解するだろう、科学技術的にうみだされた非人間が存在しうると考えるのである。

かくして、Roden は、クリティカルなポストヒューマニズムが言うように、我々がすでに、我々がそうであると考えてきた人間ではないとするならば、人間性をラディカルに打ち破るポストヒューマンが出現する可能性が排除されてしまうことを批判するのである (p.36)。

## 2.2 相違を超えて

確かに、思弁的ポストヒューマニズムの立場に立つ Roden は、もはや人間とは言えないポストヒューマンがうまれることもありうると主張する。しかしながら、そのことは、ポストヒューマンが人間よりもより良い存在であろうこと、さらには、それらの生が単一の道徳的観点から比較しうるのであることを意味しない (p.5)。トランスヒューマニズムの、死に向かう身体を超越しようという倫理的な欲望は、非人間的な後継者に関する形而上学的な主張と混同されてはならない (p.25)。言い換えれば、もはや人間とは言えないポストヒューマンがうまれるかもしれないという考えは、クリティカルなポストヒューマニズムの論者たちがトランスヒューマニズムに向ける人間中心主義への批判と両立する考えなのである。

また、Roden は、ネットワーク中の自己増強的な変化が、我々の主体性を変え我々を全く新たな主体へと変えるであろうがゆえに、主観性 (subjectivity) や主体性が有機体と機械の間の差異を廃する複雑で分散的なネットワークに依存しているという事実はやはり重要であることを認める (p.186)。そこで、我々がすでにポストヒューマンと主張するのは大げさであるが、生の特質が、終わりのない技術

的な変化に依存するようになってきているという点で、「ポストヒューマン状況」にあると主張するのは誇張ではないとするのである (p.186).

かくして、ポストヒューマンをめぐる倫理において、Rodénの思弁的ポストヒューマニズムとクリティカルなポストヒューマニズムが収斂する地平が開けてくる。人間の生、特にその主体の在り方が深く技術と結びついており、現代の技術的な変化は人間の在り方にも変化をもたらすものであると考えている点、そして、そうした状況を「ポストヒューマン状況」と認識している点において、両者は軌を一にすることになるのである。

Rodénは、非常に可塑性のあるポストヒューマンは、人間が慣れ親しんだ自己というより、不安定な「自己補強 (self-augmentation) する技術的なシステム」であろうと言う (p.184)。しかし、人間もまた、その生の特質が、終わりのない技術的な変化に依存するようになってきていることはRodénも認めるところなのである。

### 3. 「切断」というテーゼ

続いては、Rodénがポストヒューマンをめぐる倫理について、どのような考えを提示しているのかを明らかにする。Rodénは、ポストヒューマンをめぐる倫理において、自身の思弁的ポストヒューマニズムとクリティカルなポストヒューマニズムが収斂するという考えを示しているが、その収斂された立場を、バイタル・ポストヒューマニズム (vital posthumanism) と呼んでいる (p.182-192)。

Rodénは、自律的システムに基づいたアプローチでは、機能的な自律性を示すがゆえに、たとえ人間には理解できないような存在であったとしても、ポストヒューマンを生きていると考える (p.183)。そのアプローチでは、「隠された生の本質」の把握は必要ではない (p.183)。ポストヒューマンを生きていると見なすために、記述的な内容をもつ何らかの特徴を備えている必要はないのである。

#### 3.1 「切断」という概念

さて、Rodénは、これまで分析してきたような自律するシステムに基づくアプローチと関連させつつ、「切断」というテーゼを提示する (p.147-148)。

「切断」とは、極めて高いレベルの機能的自律性をもちつつも非常に異なる力をもつ集合体 (ワイド・ヒューマン<sup>(3)</sup>、ポストヒューマン、テクノロジー、人間) の間の関係である。「切断」は集合体の間の邂逅によってうみだされる特異なイベントとして考えるのが最も適切である。それは、他者になる可能性を顕在化するのであるが、潜在的傾向性が全く新しい環境によって明らかになるのであるから、構成要素の性質の予想外な変更として考えられるべきではない。「切断」は、構成要素として技術をもつワイド・ヒューマンと人間とポストヒューマンの単なる結合ではない。むしろ、そこから安定した行為や性質が徐々にうまれるようなイベントである。かくして、「切断」というテーゼは、我々のポストヒューマン的な後継者の性質を未決定にしておくばかりではなく、「切断」に参加するすべての人間の性質を未決定にしておく。

「切断」はイベントであり、ものではない。各構成要素の性質が、その発展によって未決定の状態となるのであるから、それは、明らかに生成の主体を欠く生成のケースである。「切断」は、超越的な主体のようなものでもない。「切断」を理解するためには、存在論的なモデルを Jacques Derrida や Gilles Deleuze の議論から取り入れるのが適切であろう。独立しているが、相互に作用しあっている移動可能な構成要素の存在は、集合体に、変則的な結合のための開かれた能力を与える。このことは、その本質がすでに自然のレパートリーのうちを与えられている何かになることを必要とされない生成を可能にするのである。

### 3.2 反本質主義

Rodenによれば、この「切断」というテーゼは、反本質主義的な特質をもつ (pp.113-114)。「切断」のテーゼは、人類学的本質主義の拒絶を含むものではないが、本質的な人間の特徴の参照を不必要にする。人類学的な本質主義を捨てざる最も説得力のある議論は自然主義的なものである。本質主義的な性質は、世界がいかに生物学的、技術的、そして社会的構造と存在を得たかについての我々の最良の科学的説明の中で何の役割も果たさないように見える。このような考えにおいては、形式は、上から物質に課されるものではなく、特定の存在の間の差異の拡大と抑制に拠って立つ産出メカニズムを通じて現れるものである。一般的にこうした青写真を抱くとしたら、本質主義はミスリーディングな現実の青写真を提供することになる。

Roden はまた、Manuel Delanda の、組織化する形式と物質の間のヒエラルキーを拒絶する“フラット存在論”(Delanda: 2013)を援用する (pp.114-115)。Delanda の言うように、階層的な存在論とは、それを組織するための、本質のようなカテゴリー存在をもつものに対して、フラットな宇宙は、存在論的な地位ではなく、もっぱらユニークで特異な個体からなる。つまり、諸存在の性質と能力は、決して超越的存在によって課されるのではなく、様々な尺度において特殊なもの間の因果的な相互作用から発展する。そして、フラットな存在論は自然的なもの的人工的なものに対する優位性を認めることはないのである。

## 4. 「切断」の倫理

「切断」というテーゼを提示する Roden は、「切断」の概念に基づく倫理について論じている。Roden がポストヒューマン状況における倫理として提示する「切断」の倫理の青写真を以下に示す (pp.186-191)。

近代の技術的システムの自己補強的で反-最終的な性質は、倫理的判断が採用される状況が、人間には究極的にはコントロールしえないシステムによって上書きされうるということを意味している。「切断」は、まさに分散し分裂し拡散する諸システムの力の最も極端な結果である。かくして、Roden が示すポストヒューマニズムの倫理は、指令的なものではなく、問題を明らかにする手段である。問題は単純であり、また、現在の状況によって引き起こされるものである。「切断」は、明確な言葉でそのこ

とを表している。問題とは主体性の問題であり、機能的に自律的でありつづける方法である。技術依存的な存在では、機能的自律性は、それに資するポストヒューマン的な可能空間を探りだし、機能的自律性に資することのないものを避けて「切断」にしたがう場合にはじめて維持される。

そして、こうしたポストヒューマン状況の分析に拠って立つならば、反-最終的な地球規模の技術と関わっていることは、我々、あるいは、機能的に自律する主体に困難な倫理的選択を迫っている。狭い意味での人間、あるいは、広い意味での人間である者は、ポストヒューマンになる、あるいは、ポストヒューマンに邂逅する可能性をもつ。ポストヒューマンとの邂逅もまた人間を予測しえないようなものに変える可能性がある。その結果、人間は新たな価値を選び取る責任を負うことになるであろう。ポストヒューマンの存在はまた、ポストヒューマン的な選択の結果として新たな生態上の価値をうむ可能性もある。

問題含みだとしても、これは、ポストヒューマン状況、あるいは、「切断」の否定的な結果と見なされる必要はない。「切断」とは、まさに、生きているシステムの「有機体的な、あるいは、生の目的性を超えた生命線」(Colebrook, 2012: 200)をうみだす能力のより進んだ表れである。十分に複雑で精巧などのシステムにとっても、世界との新たな機能的結合を成し遂げる能力は、そのシステムの柔軟性と力を決定する。同様に、機能的自律性の徹底的な縮小は力の減少なのである。

「切断」の可能性を備えた機能的に自律性をもつシステムのいずれも、不確かな未来に直面するであろう。そのため、「切断」によって機能的に自律性をもつシステムすべてに引き起こされる問題は、同じである。すなわち、その活動が自己維持であるようなレベルで、機能的な自律性を維持するにはどうしたらよいか。同様の倫理的問題が、現在の自己誘発的な技術的ネットワークのうちにある人間と非人間に対しても引き起こされる。「切断」に直面する機能的に自律性をもつ存在は、その力と構造的な柔軟性を可能な限り最大化することに関心をもつであろう。「切断」の可能性は、存在論上のハイパーモダニティ (hypermodernity) が人間と将来のポストヒューマンにとっての生態上の価値であることを意味している。非常に適応性があり、構造的に複雑で可塑的な性質をもっていることは、本来備わっている価値ではない。しかしながら、我々の技術システムの進化が全くコントロールできないのであれば、それは、ローカルな生態上の価値である。

人間の側であろうと、ポストヒューマンの側であろうと「切断」を通じて主体性のための空間をつくることは、鋭敏な感覚とその感覚を通じて持続可能な道を見きわめることが求められる。このことはまた、これらの道を形成し推し進めるための技術的手段をうみだすことを求める。ポストヒューマン的な方略は、発明という策略であり、新たな主体形成に関する実験という策略である。かくして、ポストヒューマン主義の倫理は、Stelarcの「完全な身体のためのユートピア的な青写真ではなく、むしろ、代替の機能と形式をもった機能的なシステムについての思索である」(in Smith, 2005: 228-229)という言葉によって最もよく表されるのである。

### Ⅲ. 「切断」の倫理の意義

Rodenによれば、集合体の理論に基づいた「切断」という倫理は、指令的なものではなく、自己を維持する方略を記述し明らかにするものである。本節では、その「切断」というテーゼをポストヒューマン状況に対応するための倫理として<引き受ける>ことの意義について若干の考察を加えてみたい。

まず前提となっているのは、「切断」という倫理は、非常に高いレベルの機能的自律性をもつ集合体の中の倫理であるということである。この機能的な自律性は、必ずしも、自身の生についての表象をもちあわせていない、あるいは、自身を「自己」として把握していない存在ももちうるものである。それは、道徳的行為者と道徳的受容者の概念の中核に置かれてきた<自由意志をもち、その意志にしたがう自律的な主体>の間のみならず、従来想定されてきた主体とそれとは異なる主体との間、および、従来想定されてきた主体とは異なる主体同士の間にも起こりつつある倫理である。その意味では、「切断」は、これまで倫理的に主体と見なされることがなかった存在をも、それに照らし合わせて考えることができるテーゼとなっている。とするならば、「切断」の倫理を引き受けることで動物やロボットなど、近代以降のヒューマニズムにおいては主体として考えられてこなかった存在との関係の構築を、人間間の関係の構築と異なるが同等のものとして捉える地平を切り開くことであろう。

また、「切断」という倫理は、自律的システムに基づくアプローチが全体主義的なものとなることを防いでいる。「切断」は各集合体が自己を維持しようとする方略であるが、それは集合体の分散や拡散をもたらす。各集合体が何かの目的のもとに有機的に統合することが各集合体自身の維持にはつながらないという認識をこのテーゼは示しているのである。

このテーゼを前提とするならば、状況の変化に応じて他の集合体との従来の関係を断ち切り、新たな関係をつくりだす力こそが、自己を維持する生の力である。逆に言えば、「切断」が阻まれた状態は、その生の力を失った状態である。さらに、このテーゼを前提にするならば、「切断」を試みることが自身の維持につながらない状態は、ディストピアとも呼ぶべき状態であろう。

最初に述べたように、Rodenの提示する「切断」は、<ポストヒューマン状況においては、「切断」を通じて、「機能的に自律する集合体」としての主体が自己自身を維持している>という認識に基づく倫理である。それは、記述的なものであり、そのような倫理を<引き受ける>かどうかは、これからの我々の選択にかかっているとさえいえる。しかしながら、自己の<生>の維持というのは<自由意志>をもつ人間が倫理のテーゼへ向かう動機づけを形成すると考えられてきていいる。例えば、J. L. Mackieは、人間同士の「限りある同情心」(虐待しあうようなことはしないというレベルで働く「同情心」)を乗り越えるための工夫、つまり、ともすると際限のない争いが起こり生命の重大な危険が生じる状態を回避するための工夫として、「道徳体系」がうみだされたと論じる(Mackie, 1991: 107-111)<sup>(4)</sup>。このような議論を考慮に入れるならば、「切断」というテーゼがポストヒューマン状況においてどのように作用しているのかが示されたことの意義は大きいといえる。

#### IV. 結び

本稿では、Roden の分析に基づき、ポストヒューマン状況において我々がどのような倫理をうみだしつつあるのかを探究した。

Roden は、その倫理を探るに先立ち、ポストヒューマン状況のもとにある自己について考察し、「自己」を「機能的に自律する集合体 (assemblage)」と捉えた。Roden の「自律的システム」に基づくアプローチに拠って立つならば、表象をもつかもたないかに関わらず、機能的な自律性をもつ集合体としての主体を、ポストヒューマン状況の「自己」と捉えることができるのである。

こうした自律的システムに基づくアプローチと関連させつつ、Roden は、「切断」という倫理的テーゼを提示する。Roden によれば、「切断」は、集合体間の関係であり、集合体間の邂逅によってうみだされる特異なイベントとして考えることができる。また、Roden は、このテーゼを前提とするならば、状況の変化に応じて他の集合体との従来の関係を断ち切り新たな関係をつくりだす力こそが、自身を維持する生の力であると結論づけている。Roden の議論にしたがえば、「切断」が阻まれた状態は、その生の力を失った状態である。

こうした Roden が提示する「切断」という倫理的テーゼは記述的なものであり、その倫理をく引き受けるかどうかは、これからの我々の選択にかかっていると見えよう。しかしながら、人間を道徳体系へと向かわしめたのは自己を維持しようとする生への意志と考える立場からするならば、注目に値する。そうした立場からするならば、そのテーゼはポストヒューマン・エシックスの出発点であり、欠くべからざるものと位置づけることができるであろう。

しかし、「切断」というテーゼはあくまで出発点にすぎない。今後は、Roden が示したような、「切断」というテーゼを出発点とする倫理がどのような未来社会をつくりだしていくのかについてさらに考察を進めていきたい。

#### 注

- (1) Gilles Deleuze と Guattari Félix が提唱した概念の1つ。Deleuze によれば、土地や物体=身体がある特定の刻印から脱げるときに起こる(芳川・堀, 2015: 151)。例えば、進化の過程で、ヒト科の動物が大地上から前肢を引き上げ、手がまず運動機能をもち、ものをつかむようになるのが肢の脱領土化であり、同時にその手につかまれ折られた枝が、植物から道具としての棒へと脱領土化される(同上)。脱領土化は、「肢」と「枝」のように、互いに変化へと巻き込み合う2つの要素をもっていることを強調しており、この「二重」の脱領土化が「手」と「道具」という別の性質をものへと再領土化される(同上)。
- (2) アメリカのコンピュータ研究者で未来学研究者の Rey Kurzweil が *The Singularity Is Near: When Humans Transcend Biology* (2005, London: Viking) において提唱し有名となった概念(中島, 2018: 216)。生命の誕生から細胞ができるまでの間に10億年ぐらゐの時間がかかった。その後カンブリア紀(約5億年前)があり、爬虫類の誕生(約3億年前)が続き、哺乳類誕生(約2億年前)、霊長類誕生(約7000万年前)と続くのだが、どんどんその間隔が短くなっている。文字ができてから印刷の発明、産業革命、コンピュータの登場と、次の新しい出来事が起こるまでの間隔は、億から10へと、年数の桁が少なくなり、技術の進歩が加速している。それゆえ、今後の社会、未来を見るときには、今までと同じスピードで動いていくと思う

のは間違いだというのが、Kurzweilの主張である(中島, 2018: 126).

コンピュータに関してはムーアの法則といって、処理能力が約2年ごとに倍になるという経験則がある。2のx乗で(指数関数的に)早くなっていく。20年であれば1000倍である。そうすると、あるとき、人間の処理能力を超えることになる。Kurzweilはそれを2045年と計算している(中島, 2018: 128).

- (3) ワイド・ヒューマンとはRodenが提唱する概念である。ホモサピエンスではない、人間的な社会-技術的集合体を指すとされており、家畜化された動物、携帯電話、歯ブラシなどが例として挙げられている(Roden, 2014: 112).
- (4) 日本語訳に、加藤尚武監訳『倫理学—道徳を創造する—』(哲書房, 1990年)がある。日本語訳では, pp. 157-161.

### 引用・参考文献一覧

- Collier, J. D. and C. A. Hooker (1999). "Complexly Organised Dynamical Systems." *Open Systems & Information Dynamics*, 6, 241-302.
- Colebrook, C. (2012). "Not Symbiosis, Not Now: Why Anthropogenic Change Is Not Really Human." *Oxford Literary Review*, 34.2, 185-209.
- Badmington, Neil (2000) *Posthumanism*. Basingstoke: Palgrave.
- \_\_\_\_\_ (2003) "Theorizing Posthumanism." *Cultural Critique*, 53, 10-27.
- Delanda, Manuel (2013) *Intensive Science and Virtual Philosophy* (2002). Bloomsbury Academic.
- Deleuze, Gilles and Félix Guattari (1980). *Mille plateaux; Capitalisme et schizophrénie 2*. Paris: Editions de Minuit.
- [英訳: *A Thousand Plateaus: Capitalism and Schizophrenia*. Translated by Brian Massumi. Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 1987.]
- [日本語訳: 宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・森中高明訳『千のプラト—資本主義と分裂症—』河出書房新社, 1994年.]
- Derrida, Jacques (1967) *L'écriture et la différence*. Paris: Editions du Seuil.
- [英訳: *Writing and Difference* (1978). Translated by Alan Bass. London: Routledge, 2001.]
- [日本語訳: 谷口博史訳『エクリチュールと差異(改訳版)』法政大学出版局, 2022年.]
- Hayles, N. Katherine (1999) *How We Became Posthuman: Virtual Bodies in Cybernetics, Literature, and Informatics*. Chicago: University Press of Chicago.
- Mackie, J. L. (1977) *Ethics: Inventing Right and Wrong*. London: Penguin Books.
- [日本語訳: 加藤尚武監訳『倫理学—道徳を創造する—』哲書房, 1990年)
- 中島秀之 (2018) 「シンギュラリティ」中島秀之・丸山博編著『人工知能—その到達点と未来—』小学館, pp. 125-131.
- Nayar, Pramod K. (2014) *Posthumanism*. Cambridge: Polity Press.
- Roden, David (2015) *Posthuman Life: Philosophy at the Edge of the Human*. New York: Routledge.
- Smith, Marquard (ed.) (2005) *Stelarc: The Monograph*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- 芳川泰久・堀千晶 (2015) 『増補新版 ドゥルーズ キーワード 89』せりか書房.

【謝辞】 abstractの執筆に際して、丸善雄松堂 (<https://kw.maruzen.co.jp/kousei-honyaku/>) が校正作業を引き受けてくれた。ここに感謝の意を表したい。